



図1：照葉樹林の分布（黒塗り）とその文化要素を示す原図。『中尾佐助文庫・資料総目』  
清書された図は、『栽培植物と農耕の起源』に掲載されている。

## 中尾佐助コレクション「照葉樹林文化論」を生み出した原資料



大阪公立大学の中百舌鳥図書館の1階に、「日本初のブータン踏査と独自のな農耕文化論」と題して、中尾佐助コレクションが展示されている。中尾佐助<sup>1916~1993</sup>大阪府立大学 名誉教授は、1949年から1980年まで、大阪府立大学農学部（1955年9月に浪速大学より名称変更）に在職した。専門は栽培植物学・遺伝育種学・民族植物学と幅広く、「照葉樹林文化論」をはじめ、独自のな農耕文化論を展開している。

照葉樹とは、カシ（ドングリの仲間）やツバキなどの常緑広葉樹のことであり、葉は厚く光沢があるので、この名がある。照葉樹を中心とした林がヒマラヤから西日本にかけての暖温帯に連なり、照葉樹林帯とよばれている。

中尾は、1952年に日本山岳会のマナスル踏査隊員としてネパールに行き、ヒマラヤの植物・農業・栽培植物などを調べ、この地域の探検を開始した（中尾は、野外調査ではなく探検という言葉を用いた。最終講義のタイトルは「探検と私」であった）。1958年には、ブータン国王から招待され、当時外国人が足を踏み入れていなかったブータンを調査した。そして、この地域の植物や民族文化の調査

を通じて、「照葉樹林帯という植生の地域における、人間の生活に根ざした文化の共通性」に気がついた。そのきっかけは、中国中南部～日本では栽培植物であるシソがヒマラヤ中腹のどこでも見られたことだった。シソは「ヒマラヤ中腹～中国中南部～日本」の特産物ということができ、照葉樹林帯と深く結びついた文化要素であることを見出した。さらに共通の文化要素を探すと、「ワラビ・クズ・野生のイモ類・ドングリなどを水にさらしてアク抜きをする、茶の葉を加工して飲用する、カイコの繭から絹を作る、ウルシの樹液を用いて漆器を作る、麴を用いて酒を醸造する」などがあり、照葉樹林帯地域の生活や文化に、共通の要素があることを指摘し、「照葉樹林文化」と名付けた（『栽培植物と農耕の起源』1966年岩波新書）。それは、照葉樹林帯に住む人々が共通の文化を生み出し、伝えてきたという文化の起源に関する学説であった。

照葉樹林文化論は「未完の大仮説」とも言われ提唱後も新知見が加えられている。中尾は、1976年には、上山春平・佐々木高明と共に、新たな文化要素を確認し、照葉樹林文化の起源地として、「東亜半月弧」を設定し



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い

お申込み時にTOP1「特定プロジェクトのために：⑨-3、⑨-7」を選択してください。⑨-3：1号館ミュージアム構想のために ⑨-7：大阪府立大学創基140年事業のために  
【お問い合わせ】ステークホルダー連携推進室 TEL: 06-6605-3415  
<https://www.omu.ac.jp/about/community/fund/>

編集発行  
大阪公立大学 大学史資料室  
協創研究センター・大学史編纂研究所  
杉本キャンパス学術情報総合センター6階（大学史資料室）  
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp

写真1



写真2



写真3



図2

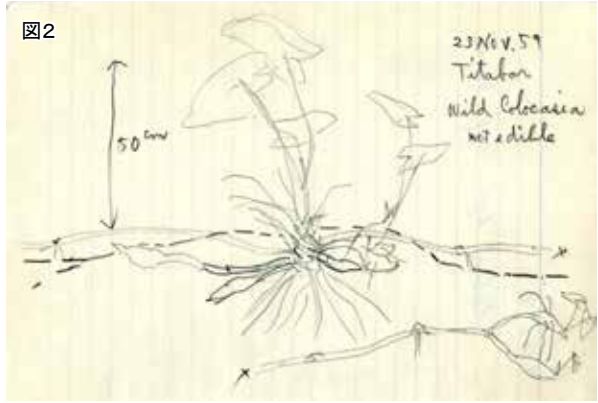


写真1：南ブータンの雨の降る暗い照葉樹林（1958年）。車道はなく、中尾は、インド国境から4日間歩いてブータンの農業地帯に到着した。写真2：押し葉標本を作る中尾佐助（インド、カリンボン、1958年）。吊るした新聞紙は、乾燥させ、押し葉をはさむ時に再度使用する。写真3：酒を作る様子（カトマンズ）。ネパールの酒はシコクビエからつくるものが多いが、コメ・トウモロコシを混ぜることもある。写真は、日本酒のように、コメだけで仕込んでいる。図2：フィールドノートに書かれた野生サトイモのスケッチ（シッキム・アッサム、1959年）。親株から出た長い茎が地表をはう様子が描かれている。茎が長く描ききれないため×印でつなげて描かれている。（出典：中尾佐助コレクション）

ている（『続・照葉樹林文化』1976年 中公新書）。また、大阪府立大学照葉樹林文化研究会は、中尾史観を批判的に継承発展させたい意図のもと、現地調査・研究会・シンポジウムを行ない、その成果は、『照葉樹林文化論の現代的展開』（2001年、北海道大学図書刊行会）としてまとめられ、新たな展望をもった視点が提起されている。

中尾の研究は、探検に根ざしている。探検の記録はフィールドノートやカラースライドとして残され、蔵書などとともに中尾佐助コレクションとして、中百舌鳥図書館に収蔵されている。

**中尾佐助コレクション**

図書：約 3500 冊、雑誌 60 誌 3000 冊  
 各種資料：カラースライド、フィールドノート、遠征隊アルバム、スクラップブック、写真ネガフィルム、写真原版、8ミリテープ、録音テープ、写真パネル、自筆原稿、地図など約 3000 点  
 「中尾佐助文献・資料総目」（大阪府立大学総合情報センター 1997年）

図書は、中百舌鳥図書館の開架図書として閲覧でき、中尾の研究室で本棚を見ているような気持ちで、中尾の関心の広さを体感できる。また、ブータン調査、カラコルム調査など 22000 枚のカラースライドとフィールドノートなどがデータベースとして公開されている。

中尾は探検の過程で、1万数千点の植物を採集した。それらの標本は、その分類群の専門の研究者によって研究され、約 50 の新種が記載された。標本は研究された研究機関に保管され、大阪公立大学には、60 点の標本が収蔵されている。

中尾は生涯に 659 編の著作を著し、中尾佐助著作集（全 6 巻、2004-2006 年、北海道大学図書刊行会）が出版され、中尾の自然観・文化観を知ることができる。全 6 巻のタイトルである『農耕の起源と栽培植物』『料理の起源と食文化』『探検博物学』『景観と花文化』『分類の発想』『照葉樹林文化論』から、中尾の研究分野が幅広いことがわかる。通常、研究者が退職したり、逝去したりすると、蔵書や研究資料は散逸することが多い。ご遺族の理解や山口裕文 大阪府立大学名誉教授の努力により、大学の学術資産として残された中尾佐助コレクションは「照葉樹林文化論」をはじめとする「独創的な農耕文化論」を生み出した原資料である。〔山口裕文名誉教授には、原稿を読んでいただき、様々なご教示をしていただきました。お礼申し上げます。〕  
 （大学史資料室：塚腰 実・渡部陽子）



**資料室だより**

◆大阪公立大学発足にともなう「大学史資料室」設置を機に、「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行することになりました。大阪公立大学の貴重な学術資料を紹介する方針です。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140周年展+大学史資料館（大学博物館）設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘！」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

**大学史資料室からのお願い**

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター 6 階 大学史資料室  
 Tel：06-6605-3371